カシマゴールの現地適応性を確認

～稈の折れ（中折れ）が少なく収穫物の損失が少ない「カシマゴール」の特性～

奥野 綾子（尾張農林水産事務所農業改良普及課　稲沢駐在室）

【平成２６年１１月１８日掲載】

【要約】

平成24年産から26年産の大麦栽培において麦茶用六条大麦の新品種「カシマゴール」の現地における適応性を検討した。その結果、慣行の「カシマムギ」と比べて成熟期以降に稈（かん）が折れる中折れが少なく、収量は多かった。したがって、「カシマゴール」を産地に導入することで中折れによる収穫ロスを減らし、高い収量を確保できると考えられる。

１　はじめに（目的）

尾張地域北部は県内唯一の麦茶用六条大麦の生産地であり、生産した大麦は地元の麦茶製造会社に供給されている。管内の大麦作付面積の約７割を占る主力品種「カシマムギ」は成熟期以降に稈（かん）が折れる「中折れ」により収穫時に損失が生じるため、中折れしにくい品種が望まれていた。独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構が育成した「カシマゴール」は「カシマムギ」と比較して中折れが少なく、多収という特徴を持つ。そこで、「カシマゴール」の現地適応性の確認を行った。

２　試験概要、調査方法

平成24年産では、中折れ歩合、品質などを、平成25年産から平成26年産にかけては、出穂期、成熟期、収量と品質などを調査した。播種量は７kg/10a（ドリル播き）、施肥量は平成24年産、25年産では基肥が窒素成分で7.7kg/10a、追肥が4.2kg/10a、実肥が２～３kg/10aとした。平成26年産では追肥を２回行い、１回目が2.8kg/10a、２回目が２～３kg/10a、実肥が４kg/10aとした。

３　結果

（１）平成24年産

ア　倒伏程度・中折れ歩合

倒伏程度は「カシマゴール」の方が小さかった。茎の中折れ歩合は「カシマゴール」は成熟期前に０％であったのに対し、「カシマムギ」は30%であった。また、３日後の５月28日には「カシマゴール」の10％発生に対し、「カシマムギ」では50%であった（表１、図１）。

表１．倒伏・中折れ程度

品　　種	倒伏程度[1)]	成熟期	中折れ歩合[2)]		
			5/25	5/28	5/31
		月/日	%	%	%
カシマゴール	0	5/26	0	10	50
カシマムギ	0.5	5/26	30	50	－

１）倒伏程度は０（無）～５（甚）の６段階。
２）中折れ歩合は目視による。カシマムギは５月31日に収穫

写真１　中折れの様子（平成24年5月25日撮影　左：カシマムギ、右：カシマゴール）

イ　品質調査結果

「カシマゴール」のタンパク質含量は「カシマムギ」と比べて低かったが、容積重と千粒重は同程度であった。また、外観品質は優れていた（表２）。

表２．品質調査結果

品　　種	容積重	千粒重	タンパク質含量	外観品質[1)]
	g/L	g/千粒	%	
カシマゴール	725	33.5	10.7	2.0
カシマムギ	731	33.5	11.4	2.2

１）外観品質は目視による。2.0が1等下限、5.0が2等下限相当。

（２）平成25年産・26年産

「カシマゴール」の出穂期は「カシマムギ」と同じであった。また、成熟期は２日早かった。稈（かん）長は同程度で、穂長はやや長かった。穂数は「カシマゴール」の方が多く、収量も多かった。タンパク質含量は10.1%で「カシマムギ」よりも高かった。容積重は「カシマゴール」の方が若干大きかった。倒伏程度は「カシマゴール」の方が小さかった（表３）。

表３．生育および収量・品質調査結果（平成25、26年産平均値）

品種	出穂期	成熟期	稈長	穂長	穂数	収量	同左比率	タンパク質含量	容積重	千粒重	倒伏程度
	月/日	月/日	cm	cm	本/m^2	kg/10a	%	%	g/L	g/千粒	
カシマゴール	4/11	5/23	81	4.6	514	767	121	10.1	755	37.4	0.4
カシマムギ	4/11	5/25	81	4.2	476	634	100	8.2	735	37.1	1.0

※坪刈り調査結果

４　まとめ

平成25、26年産の結果から「カシマムギ」よりも穂数と収量が多かったことから、「カシマゴール」は「カシマムギ」と比べて収量性が高いと考えられる。また、生産者からは「カシマゴール」は「カシマムギ」に比べて中折れが少なく、収穫時の損失が少ないという声が多かった。

なお、生育時の観察では、「カシマゴール」の葉色値は「カシマムギ」と比べて小さかった（データ略）。他県でも同様の報告（茨城県農業総合センター．六条大麦カシマゴールの準奨励品種採用．平成22年度　関東東海北陸農業研究成果）がされているが、これは

「カシマゴール」は「カシマムギ」と比べて葉の厚さが薄いためであり、品種特性であると考えられた。したがって、追肥量は葉色値だけではなく、生育を考慮して多肥になり過ぎないように気をつける必要があると考えられた。

今後は、麦茶用六条大麦のタンパク質品質評価基準である10.5%以上を安定して達成するために、実肥の施用時期を検討する計画である。

Copyright (C) 2014, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.
～農業に役立つ情報をお届けします！～